

【課題・問題点】

- 国内の育種改良機関や民間種豚生産者は独自に育種改良を実施しており、相互の連携・協力が弱いため、育種集団規模が小さい傾向。
- 広域的な遺伝的能力評価が実施されていない状況の中、種豚同士の能力比較ができないことから、改良が非効率な状況。
- 我が国の種豚の能力は、肉質を除けば、海外の豚改良先進諸国を下回っているところ。特に繁殖能力(1腹あたりの産子数等)は、その差が顕著になっているところ。
- 民間種豚生産者の数が減少していること、系統造成から撤退を検討している都道府県も多く存在していることから、国内の遺伝資源の確保と改良体制の存続が今後難しくなる可能性。



育種改良を加速化し、国内遺伝資源を確保・利用するためには、関係機関の協力体制を強化し、効率的・効果的に育種改良を実施することが必要



(独)家畜改良センター、都道府県、民間種豚生産者の連携による改良グループを新たに形成することで育種集団規模を拡大し、選抜圧を高め、効率的かつ効果的な育種改良を推進するとともに、優良な育種改良素材の確保・利用を図る。また、育種改良技術と併せて、繁殖技術及び飼養管理技術のさらなる向上を図る。

新たな豚改良体制の構築に向けて

【新たな育種改良グループのイメージ】

これまで独自に育種改良を行ってきた生産者及び機関が連携するためには、画一的な方針で改良を実施することは困難。このため、次の各段階での取組毎に対応が可能な機関等に協力を求め、新たな改良体制の構築を図る。

Step 1 協力・連携が可能な機関等が連携(グループ化)し、血縁ブリッジを構築した上でグループ内の種豚の遺伝的能力評価を実施。

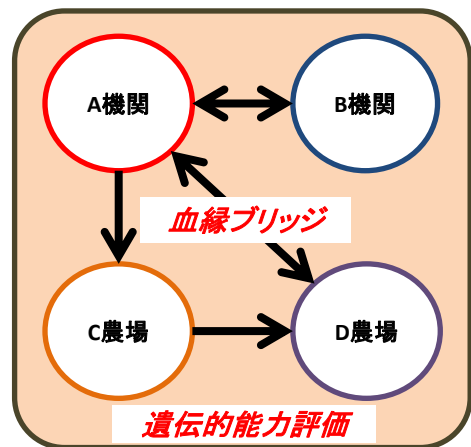
評価結果により遺伝的能力が判明した種豚を育種素材としてグループ内で相互に導入して活用。

Step 2 さらに進んだ取組として、グループ内で特定の形質について改良目標を設定し、グループ全体で改良を推進。具体的には、グループ内で計画した評価、選抜、導入方法に基づき、中心的機関等がGGP生産を担い、他のグループ参加者はGPを自らの改良に活用。

Step 1

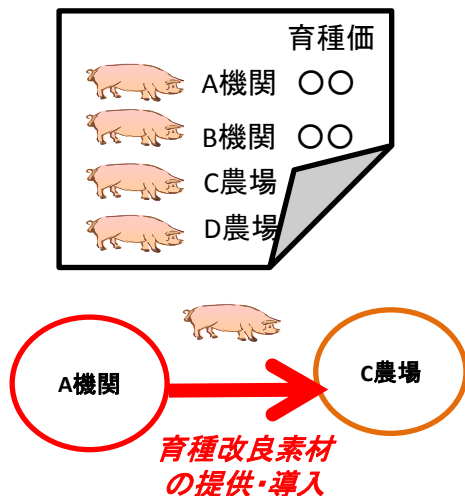
① 遺伝的能力の評価

グループ内で血縁ブリッジを構築し種豚の遺伝的能力を評価。
※血縁ブリッジの具体的な構築方法は別途検討が必要。



② 育種改良素材の活用

グループ内評価結果を基に、グループ内の機関等の中で育種改良素材を相互に活用。



Step 2

③ 広域グループでの育種改良

グループ内で特定の形質について改良目標等を定め、グループ内評価された種豚等を活用してGGPの生産及びGPの活用を行う。

